

十年前の今日、今まさに「何でも書こう会」が行われているこの時刻に東日本大震災が発生した。そのとき私は品川付近を散策中で、電車がすべて止まったので横浜郊外にある自宅まで歩いて帰った。途中で震源地が宮城県沖と知る。

翌朝からはテレビに釘付けの日々となる。三陸海岸や宮城における大津波被害の惨状は目を覆うばかり。それにもまし女川や福島原発が旧職業柄気に掛る。菅首相がヘリコプターで福島原発まで往復したという。これは只事ではないな、炉心溶融でも起きたかと危惧している最中、一号機建屋が爆発！

二日後には三号機が白煙を上げて爆発し、四日後には四号機も続く。その間消防車や空からの放水が続くが、如何にも頼りない。周辺住民の退避状況が伝えられるなか、枝野官房長官が繰り返す「ただちには心配ありません」の声明も白々しい。

此処は大丈夫か、自宅の二階より四キロ先の清掃工場の煙突を眺めると、白煙は北東へ靡いており一息つく。原子力部門にいた会社の友人達とメールで情報交換をし合ううちに、ドイツの政府機関がホームページで福島周辺の放射能拡散状況を刻々推定し公表していることを知る。なぜ日本政府が同様な発表をしないのかと疑問に思いつつ、それを見ると幸いにも概ねの時間帯で太平洋側に拡散している。

(注、後日知ったが、ある時間帯は風が北西向きに変わり飯館村など内陸側を汚染していた。また日本にもドイツと同様な拡散推定システムはあるが、天候次第では東日本全体が壊滅状態になりかねず、パニック発生を恐れ、公表を控えたようだ。政府のその姿勢は十年後の現在も続いている)

現役時代わが国の原子力タービン技術の先頭に立つ傍ら、その限界や危うさも痛感していた。退職後は大学などで次世代を担う若者へ自身の経験と考えを伝え、世の中が漸次脱原発に向かうよう努める。さらには政府の原子力安全委員会に意見具申も行った。

しかしそのわずか半年後にまさかこのような惨事が起ころうとは。無力無念の気持ちに苛まれる。そこで微力ながら世間への発信を続けようと企業OBペンクラブに入会し、強い思いを込めてエッセイ書きを始めた次第。

様々な具体的な話題を取り上げては読む方に原発について考えて貰おうと数十編を投稿した。その中でも『事実は小説より奇なり』と名付けたエッセイは十年後の今でも時々本会のアクセスランキング上位に登場する。砂漠にある地熱発電所の爆発事故について体験を語り、原発や津波と直接の関係はない。しかし福島での惨事を予告するような類似の想定外の事故で、原発にたいする自身の姿勢を大きく変える切っ掛けともなった。かなり専門的な内容であるにも拘らず、多くの方がアクセスされたことに感謝している。

十年一昔、十年経てばその間に大きな変化があるものだ。大多数の国民が原発の安全神話を信じ込まされ、原発がなければ大停電になると脅かされていた。しかし大惨事とその後の経過でそれらが全くの出鱈目だったことを知る。

小泉元首相をはじめ多くの識者や過半の国民が脱原発を望むようになった。未だ目先の利益や権益に固執する政財学界の元凶たちや電力会社は隠然と原発維持に努め、彼らの言い分に同調する頑迷固陋な輩も少なくないが、脱原発への社会の趨勢は定まってきた。

一隅での私の小さな啓蒙努力、贖罪行為としての後始末もどうやら役目を終えたようだ。あとは原発ゼロを政治信念としてきた河野太郎氏や再エネを推進する小泉進次郎氏が総理大臣となり、彼らが初心を貫徹する日を心待ちにして過ごそう。